第１回とよた子ども食堂ネットワーク交流会及びとよた子どもの支援ネットワーク交流会に参加して

2020/7/22 中京大学 成ゼミ３年 c 318079　藤本涼花

日時：7 月 15 日(水)14：00～16：00
会場：豊田市福祉センター
プログラム：開会の挨拶、成先生による講演、グループワーク、各グループから出た意見の発表、情報提供、豊田市安全確保費補助金・閉会の挨拶

■講演

「子どもの居場所に関するボランティアグループがつながる必要性」という題目で成先生の講演を聞くことができた。子ども食堂は民間発のボランタリーな取り組みで、あくまでも隙間支援と予防的機能であると述べていた。子ども食堂の運営者目線としては、「支える側も救われるところがある」と意味を見出せることこそが、子ども食堂を継続できる要因であるようだ。わいわい子ども食堂の具体例を取り上げながら、地域の人たちとの連携により自発性が生じるとし、ボランティアグループがつながる必要性があるとも述べられた。

■グループワーク

グループワークでのテーマは①コロナウイルス禍で、気を付けていること・コロナウイルス拡大、前後での活動の変化(参加者の様子、運営面など)②その他(他のグループに聞きたいこと等)であった。私は C グループだった。C グループのメンバーは、とよたプレパーク兼東山ぐぅぐぅ食堂の小黒さん、ひまわり邸の柳さん、龍の子の大羽さん、ぬくもりねっとの芝田さん、松平にこにこ子ども食堂の大村さん、福祉総合課の石川さんと國永さん、第一生命さんだった。見事に私 1 人だけが学生であった。グループ内ではぐぅぐぅ食堂とぬくもりねっとの 2 団体に、学校や地域との連携はどうしているか、密を避けながらの対策にはどのようなものがあるかといった質問が集中していたように思う。ぬくもりねっとは小学校にチラシ配布をするように促しているそう。そして、コロナ禍では大半の子ども食堂が体温測定・開催時間短縮・定員半分の徹底に努めているようだ。また、第一生命さんが子ども食堂のためにできることとして集まった意見には、活動資金の補助・タオルといった生活用品の提供等が集まった。このグループの子ども食堂の多くは、利用者が 10～30 名、そして本当に困った利用者にフォーカスを当て活動していることが分かった。ちなみに名古屋市、特にわいわい子ども食堂では、1 度に 150 人を超える大規模開催で、とりわけ困窮家庭にターゲットを絞るわけではなく非選別に活動し居場所の機能強化に努める。そのわいわいに日頃参加させてもらっている身としては、名古屋市と豊田市との違いが今回の意見交換の場において個人的には明確化した。豊田市の子ども食堂は小規模かつダイレクトに困った利用者に来てほしいという思いがより強いのかもしれないと思った。

■各グループから出た意見の発表

私たち C グループには、子ども食堂を立ち上げようとした矢先にコロナ禍のせいで身動き

が取れずまず何から始めたら良いか分からないという団体が１組あった。しかし、他グループにもこのような団体がいくつかあったこと知り驚いた。Ｃグループでの意見交換の際に國永さんから、名古屋市と比べて豊田市の方が保健所の営業許可や衛生管理等の水準が厳しいということを教えてもらった。確かに他グループの意見を聞いていても、保健所のボーダーが高いために通常の子ども食堂開催に至る子ども食堂が未だ少ないのはそのせいなのかもしれないと思った。市が異なるだけで保健所にも違いがあるのはアンフェアだし、おかしいのではないか。

■情報提供、豊田市安全確保費補助金

①フードバンクあいちについて②むすびえ・こども食堂基金について③ボランティアセンターの機能強化・ボランティアセンター運営委員会について の以上 3 点のお話があった。フードバンクあいちさんからは、食料はあるが運送のシステムがまだ整っていないとのことだった。運送費やコストを考慮し、数件の子ども食堂分の食料を代表する形で受け取ってもらいたいということで、協力してくれる子ども食堂を募っていた。むすびえさんからの説明は時間の都合上、割愛という形になった。ボランティアセンターさんからは、様々なネットワークを駆使したボランティア活動の促進やボランティアセンター事業の進捗の管理をしているとのお話だった。最後に豊田市役所福祉総合相談課から、豊田市で子ども食堂を運営する人に向けた安全確保費補助金の案内があった。衛生管理上必要となる対象経費における保険料、手数料、負担金のサポートをしてくれるもののようだ。

令和２年度第１回とよた子ども食堂ネットワーク交流会及び第１回とよた子ども支援ネットワーク交流会報告書

C318014　梅田藍子

私は７月 15 日行われたとよた子ども食堂ネットワーク交流会及び第１回とよた子ども支援ネットワーク交流会参加した。開催場所は福祉センターであった。交流会の流れとしては、開会の挨拶→成先生による講演→グループワーク→各グループから出た意見の発表→情報提供→閉会の挨拶であった。

成先生の講演では「子どもの居場所に関するボランティアグループがつながる必要性」という題名で行われた。こども食堂にただお手伝いで行っているだけの私でも子どもに家族以外の人と関わる居場所は大切だと思うが、その場にいた実際に子ども食堂の経営に携わっている人の反応を見ると多くの共感が得られるものなんだと思った。

グループワークでは４つのグループに分かれて、①新型コロナウイルスの影響により自粛していた活動を、再開して気を付けていること、②活動を自粛する前と後での変化というテーマをもとに行われた。私の A グループには、JA 高橋テラスゆうきの会、フリースペース　K、ぬくもりねっと、おおぞら若園、くっく～くらがいけ、東山ぐぅぐぅ食堂の皆さんが一緒であった。①、②とテーマはあったが、A グループのほとんどの方がこれから子ども食堂を開催しようとしている人であったため、グループワークの内容は意見交換がほとんどであったと思う。その中で活動をしていた、東山ぐぅぐぅ食堂さんは７月 20 日に子ども食堂を再開するとのことであったが、今までとは異なり、50 食限定にし、部屋で食べることができるの人数を 30 人までとし、その他の 20 人は外にある公園で食べてもらうことを想定しているそうだ。自粛期間中の活動として、３月は何もすることができなかったが、４月からは支援を頼りにパントリーを行っていた。また、５月にはパスタ屋さんとコラボするなど積極的に活動していたようだった。おおぞら若園さんは去年の８月に立ち上がり、本来であれば今年の３月から子ども食堂を行う予定であったがコロナウイルスの影響により、７月 25 日に初めて子ども食堂を行う予定。おおぞら若園さんは貧困家庭との関わりを大切に活動しており、支援でいただいた多くの食材を貧困家庭に持っていたっりもしている。そういった関わりから、貧困家庭の母親に子ども食堂の手伝いをお願いすることもあるそうだ。

その後全体のグループの発表をし、情報提供、の後閉会となった。

グループワークでは私は子ども食堂のお手伝いしかやったことがない身であったため、ほとんど会話を聞いている状態であった。コロナウイルスの影響は大きく受けているが、決してマイナスに考えずに前向きに今できることをやろうとしていると思った。皆さんが口をそろえて困っているといったのが場所の問題である。コロナウイルスがない時も場所を確保するのは難しいことであったがコロナウイルスで密になってはいけないということで更に場所を確保するのが困難になっているそうだ。そういった悩みも一人で悩んでも解決しないため、このような交流会があれば同じ悩みを相談できたり、アドレスももらえる機会になるため非常に意味のあるものだと思った。

第４回とよた子ども食堂ネットワーク交流会及び
第１回とよた子どもの支援ネットワーク交流会　参加報告

植野航史

日時：令和２年２月 19 日(水)　午後２時～午後４時
場所：福祉センター　３F 交流センター
当日の流れ：
１.あいさつ
２.団体活動説明
３.グループワーク
４.各グループから出た意見の発表
５.まとめ
６.お礼の言葉

＜次回開催＞
日時：令和２年５月 13 日（水）午後２時～４時予定
場所：福祉センター
※次回は子ども食堂ネットワーク交流会のみ

福祉センターで開催された今回の交流会には、現在子ども食堂の活動をされている団体や今後子ども食堂の活動を始める団体、学習支援や居場所作りの活動をされている団体などが集まり、交流を行った。今回、学生の参加は自分だけであり不安だったが、國長さんや川上さん、中野さんなど別のボランティア活動でお会いしたことのある方が何名かいらっしゃったため、少しほっとした。交流会に参加された団体の方々は、A から E の 10 人程度のグループに分けられた。団体活動説明では、現在（２月 19 日）とよたで活動されている子ども食堂１４カ所と今後立ち上げ、活動を始める子ども食堂４カ所、学習支援団体４カ所、居場所作りを行っている団体２カ所、子どもと関係のあるイベントをされている団体２カ所の説明を聞き、それぞれの団体の特徴や開催場所、参加者やスタッフ、ボランティアの特徴などモニターを使って説明されていた。説明後はグループごとに軽い自己紹介をし、他の子ども食堂への質問や悩みなどを K J 法を使ってまとめる作業を行った。今回、自分が所属していたのは D グループで、D グループの団体は、「みきちゃんち行こう」、「地域密着型複合福祉施設ひまわり邸」、「逢妻っ子　子ども茶の間」、「あそびとくらしとまなびの家ちゃぽっと」、「くっくらがいけ」、「きらりん」、「東山ぐうぐう食堂」、「おおぞら若園」の方で構成されていた。グループワークでは、様々な質問が出たが、ボランティアをどうやって募っているかなどのボランティアに関する質問と子ども食堂の宣伝や告知などの質問が多かった。子ども食堂の告知に関しては、小学校にチラシの配布を頼んだりすることは、不登校の生徒などターゲットを絞っての配布は難しく、なかなか求める子どもたちが来てくれないとの声があった。社会福祉協会の方も小学校や地域と連絡をとっているものの子ども食堂の周知や地域からの信頼を十分に得られないと難しい面も多いとのことだった。

ゼミ生が参加している子ども食堂の方とお話する中で、“準備から片付けまでいつもありがとう”と感謝しているとのことだった。継続的な参加は互いの信頼感もまた得られるため、子ども食堂において学生にできることもまだまだ多いと感じた。